様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６３９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２１１２

研究課題名（和文）内部被曝検査通知における医療従事者と来院者の相互行為分析

研究課題名（英文）Conversation analysis of the internal exposure test result consultation

研究代表者
黒嶋　智美（KUROSHIMA, Satomi）

玉川大学・ＥＬＦセンター・准教授

研究者番号：５０７１４００２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、乳幼児対象の内部被ばく検査における検査結果を伝える診療場面の相互行為を会話分析の手法で分析し、医師と来院者らがどのようなことに志向し、この活動を達成しているのかその一端を明らかにした。また、COVID-19の感染拡大期に入ったため新たなデータ収集は中断し、原発事故の影響を受けた地域の子どもの日常についても研究を行った。具体的には、１）来院者自身の日常的な子育てについての質問は適切に心配しているように組み立てられること、２）共通経験、共有知識を前提に行為を構築する際、協働的な文構築が達成されること、３）対象物を見ることの時間的構成が特定の行為産出に用いられることを明らかに出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、未曾有の東日本大震災と原発事故で、放射能汚染の問題にさらされた住民と、その問題に専門家として従事している医師の相互行為を、特に乳幼児に対して行った内部被ばく検査結果の通知という特定の活動における相互行為の分析であるため、学術的意義も社会的意義も大変あるものであるといえる。同様の問題を扱った研究は、本研究チームのもの以外ではあまり例がなく、日本社会が初めて経験するような事象に、子育て世代の住民らはどのような把握を示し、問題意識を持ち、日々の生活を送っているのか、その一端を明らかにできた意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：This study explored the interaction where the results of internal exposure tests for infants are communicated by doctors to the parents. Using conversation analysis, we aimed to elucidate the orientations and actions of doctors and parents in achieving this activity. Additionally, due to the spread of the COVID-19 pandemic, new data collection was suspended, and the study expanded to include the daily lives of children in areas affected by the nuclear power plant accident in Fukushima. Specifically, we were able to describe that: 1) questions about everyday childcare posed by parents are constructed to appropriately express their concern; 2) when actions are built upon shared experiences and knowledge, collaborative construction of a sentence is achieved; and 3) the temporal organization of seeing the objects is utilized to produce specific actions.

研究分野：会話分析、エスノメソドロジー、応用言語学

キーワード：内部被ばく検査　原発事故　会話分析　相互行為　感情　知識　経験　知覚

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

福島第一原発事故以降の科学技術を取り巻く文脈では，低線量被ばくによる健康被害への「不安」に対し，科学的根拠だけで「安全」だと強調し対処するやり方が，却って科学的知識に依存せざるを得ない状況を生み出し，またそれが，構造的には知り得えないリスクについての知識の不在も内包するため，「不安」を助長するだけになる状況も引き起こした．原発事故から約 8 年が経った中，内部被ばくの問題は人びとにどのように認識され，把握されているのか，日本社会が過去に経験していない事象を記録するという意味でも，それを取り巻く相互行為の記述をすることは喫緊の課題であると言える．

２．研究の目的

上記の問題意識から，本研究では次の 2 つの学術的問いを立てた．(1)原発事故による人びとの日常的営みや健康への影響は，災害復興期の現在，どのような経験として知覚されているのか，（2）内部被ばくという高度に科学的な事象は，どのように住民らの感情に結び付き認識される社会的オブジェクトとなっているのかの 2 点である．

３．研究の方法

(1)研究手法

本研究の研究手法は，「会話分析」である．会話分析は，あらゆる相互行為の現場において，成員たちが実践的目的を秩序だった仕方で追求，達成しているやり方をありのままに観察し記述する分析手法である．実際の相互行為の録音・録画にもとづき，「目の前にあるが気づいていない」（Garfinkel 1967）相互行為上の現象を詳細に記述する．まず，医師が内部被ばく検査結果を通知する面談場面の相互行為の録音･録画を行い，0.2 秒のわずかな間合い，言葉の重なり，身体の動きを含めて会話分析の転記方法に従って書き起こした（トランスクリプト）．それにもとづき，相互行為参加者が，みずからの相互行為をどう組織しているのかを詳細に記述した．

(2)研究対象

本研究の対象は，福島第一原発事故から約 8 年後に行われた，医療機関における，乳幼児の内部被ばく検査の結果を医師が受検者の親に対して説明する場面の相互行為である．本研究でのデータ収集（相互行為の録音録画）は，研究参加者に対し事前に研究者から個別に説明を行い，承諾された場合にのみ行われた．前課題で集めたデータも分析の対象としたが，新型コロナウィルス感染症の感染拡大期に入ったため，2020 年以降は新たなデータ収集は行なわなかった．そのため，原発事故の影響を受けた地域の子どもの日常についても研究を行った．

４．研究成果

本研究課題の研究成果は，以下の 3 つの相互行為上の手続きである．（１）来院者自身の日常的な子育てについての質問は適切に心配しているように組み立てられること，（２）共通経験，共有知識を前提に行為を構築する際，協働的な文構築が達成されること，（３）対象物を見ることの時間的構成が特定の行為産出に用いられること．特に(１）のような成果は，今後長期的に内部被ばくの問題を考えていかなければならない私たちの社会にとって重要な示唆を与える知見であるとともに，当時の内部被ばく検査をめぐる相互行為を記録した貴重な資料でもあるといえる．以下に，事例分析を示す．

（１）来院者の子育てについての質問にみられる心配事の提示

受検者である乳幼児の親（来院者）は，一通り検査結果が通知されると，自分たちの子育てにかんする心配事や懸念を表明する機会が提供される．このような相互行為上の環境において，親たちは，共通して望ましくない想定や懸念の程度を軽減するいくつかの方法を用い，自分たちの子育てについて確認を求める．つまり，望ましくない状況を想定しつつも，そうした心配を過度にしていない態度を示すのである．親は自分たちが普段行っている日常の活動が内部被ばく検査という文脈に関連付けて適切であることに志向し，子どもの安全について適切に懸念を持ち，直接的な責任を負う主体として振る舞う．次の事例 1 では医師が検査結果を一通り説明し終えた後，来院者に質問や懸念の表明を促す（1-2 行目）．

(1) [bs4-2] [00015] [12:27]

```
01  医師:     ま，なんでもいいです．なにか (.) 聞いときたいこととか，
02            気になることとかあれば (.) と思いますが．
03            (1.0)
04  来院: →   *↓う:::::ん (.) なんか (.) 公園とかで
05        →   つ- 土遊びとか[:.
06  医師:                    [ああ::ああ:: [ああ:::
07  来院: →                                [そういうのって，
08  来院: →   させない方[がいいんですか
09  医師:                 [あ，別に別に: あの::: (.) ↓特に何も
10            問題ないと思います[けど．
11  来院:                        [あ，だい[じょうぶなんですか?
12  医師:                                 [うんうん
```

来院者は短い沈黙のあと，言い淀みながら考えていることを主張した後，4 行目から「土遊び」の是非について助言を求める質問をする．この質問では，来院者が自らを，子どもを遊ばせる責任主体として位置づけ（8 行目「させない」），自分たちの普段行っている子育てについての懸念の提示として質問を組み立てている．ここでは，公園「とか」，土遊び「とか」のように，あくまでも一事例としてこれらの懸念事項の対象が示され，公園での土遊びのような事例が「そういうの」といった一般的なことがらとして提示されるやり方が用いられている．つまり，ここで示される懸念の程度が軽減される工夫がなされている．またこの質問が言い淀みによって遅延されたことからも，それが，以前からある差し迫った心配事としてではなく，質問が促されたことに応じてなされたという含意を持つといえる．こうした振る舞いによって，過度に心配しているのではなく，適切に心配をしていることが示されるようなやり方になっている．このようなふるまいは，Nishizaka (2017)が示した，過度に心配しすぎず，適度に放射線内部被曝を恐れ，それに沿った適切な振る舞いをするという道徳的制約に志向しているといえる．

これに対して医師は，端的に「はい」「いいえ」で応答するのではなく，自身の専門家としての判断（「別に大丈夫」）によって来院者に保証を行うことで，まずは心配を払拭しようとする（9-10 行目）．つまり，来院者による助言の求めの質問を心配事の提示として理解したことを示す．これ以降（引用割愛），医師はなぜ問題がないといえるのか，説明を展開していく．この説明は，典型的に受け手が知らないことを教示するようなやり方でなされており，医師とは対照的に，来院者はこうした事柄に対して非専門家であり，知識がないことに対して心配を抱くという帰属の仕方がなされる．そのような医師による非対称的な知識状態を前提とする教示活動の仕方は，来院者が示す心配事を非専門家としてもっともなものとして位置づけ，来院者の心配事に対する態度に配慮したものでもある．

来院者たちのやり方に共通してみられるのは，こうした適度に心配するということの達成であった．医師によって最初にその機会が作られた局面で，来院者らが共通して望ましくない事態を想定しつつも，それらに対して適切に心配していることを示すやり方が用いられていることは合理的である．さらに，この最初の心配事の提示に対して，医師からの応答が概ね完了すると（それらは往々にして心配を払拭するものである），その時点で，来院者がもしまだ心配事を抱えているならば，それを開示することが出来る環境が整えられる．この後続の機会になされる心配事の提示は，最初のそれとは違って，望ましい状態を想定した内容になることが多い．たとえば，次の断片 2 は，断片 1 の後続のやりとりである．来院者は 1，2 行目で野菜などの食べ物の産地について，「あまり気にしなくてもいい」ことを確認する．先の事例とは異なり，「望ましい想定」の確認になっている．

```
(2) [bs4-2] [00015] [13:15]
01  来院: →  野菜とかそういった食べ物とかっていうのも::福島県産とか(.)
02          → あんま気にしなくても(.) い~[いんですかね？
03  医師:                                [あの:: ま もちろんね:?
04              その::福島県産を避けるっていうお母さん[と::
05  来院:                                              [は:い
06  医師:       避けないっていうお母さん[が:: 半々くらい[いるわけよね？
07  来院:                                [は:い          [うんうんうん
08  医師:       で 小さい(.) 子供の:
09  来院:       は[い.
10  医師:         [お母さんとかだったら,やっぱり.h ろくよ:んとか[ご:ご:ぐらいいるわけよね?
12  来院:                                                        [ああ ああ
13  来院:       はい.
```

直前では，土遊びの際に「土とかを食べる」わけじゃないから大丈夫であるという保証が医師によってなされていた．そのため，1，2 行目の質問は食事と関連付けられている（例：「も」）．心配事の対象とするものが，「土」と「野菜」と「食べ物」で異なっていたとしても，「何も問題がない」と医師から保証された文脈でさらに別の心配事を望ましくない想定によって聞くことは，医師の保証が効果的でないことを含意してしまう可能性があり，そのような含意は，適切に心配をするのではなく，過度に（また闇雲に）心配しているという態度表明にもなるだろう．また，ここでも，対象の範囲を限定しない「とか」（1 行目）や，程度を軽減する「あんま」（1 行目）などが用いられており，決して，「全く」問題がないことが確認されるわけではない．そのような聞き方は逆に懐疑的になっている可能性や，医師に対する専門家としての能力，責任を強く問うことになり，心配事を提示する方法として適切であるとはいい難いだろう．つまり，この後続の質問は，それに先立つ質問があってなされるものであるため，適切に心配することを親として行うことに志向するのであれば，先の質問に対する医師の応答をきちんと理解していることがここで示されるべきである．そしてそのような理解のデモンストレーションが，まさにこの後続の質問での聞き方を望ましいことがらを尋ねるものに変化させることで達成されている．

以上見てきたように，心配事の語りが促されている局面においては，強く心配事を訴えるような形式が用いられる事例はほぼ観察されなかった．むしろ，過度に心配していないことを示す提示の仕方がなされていることから，それが様々な社会的な制約のかかった行為であるということも読み取れる．

(2) 共通経験，共有知識を前提に行為を構築すること

参加者らが，話し合いの中で互いの知識状態や権利，責任（誰が誰に対しその行為を行うべきか等）を気にかけながら，発話産出の途中で受け手の反応を細かく引き出し，協働的に進行中の行為を構築することがしばしばある．断片 3 では，住民グループが 2 ヶ月前に地元の子どもを対象に川遊びイベントを開催した振り返りをしている．ここで，木村は，以前同じグループで企画した山登りイベントではなく，川が遊び場所として最適であるということを語り始める（3 行目）．成功裏に終わったイベントのよさを改めて振り返り，イベントの成功をこの川遊びという選択に帰属させることで，来年度も同じく川で開催することの妥当性を見出す．

```
(3) [Sept, 2018] [05] [11:46] 黒嶋(2023)より
01  木村:      ↓そだね.
02  戸田:     う::ん. こういう準備をしなくちゃいけねえんだな::[とか.
03  木村: →                                                  [あの,
04  木村: → <*や::ま>とか:,じゃなくて,*このかわ::
    kim        *ペンで上を指す        *下を指しながら戸田を見入る
05  戸田:     +う:[ん.
    tod       +うなずく
06  木村: →      [が,*その::
    kim  →       ,,,->*
07  戸田: → *↑川が一番:[:
    kim       *右手で円を描く(Fig. 1)
08  木村: →                [*'や:,[*良いよね: >↓なんか,<
    kim                 -->*      *まゆげを上げる
09  戸田: →                        [+いー いい::↑い,う::ん.
    tod                             +大きくうなずく
10  戸田: → >やりやすい<かもしれない'すね?
11  木村: → うん.山とかだと:*
    kim                        *上を見て顔をしかめる
12            (.)
13  戸田: → 草刈り*とかっちゅうのは[ね,ちょっと難しいから::う:ん.
    kim             *戸田を見る->>
14  木村: →                         [>そうそうそうそうそう.<
15  木村: → >*だから::,< う:ん, +*川が一番良:いかもね[:?
    kim        *中空を見る        *戸田を見る->>
    tod                          +ジョッキをみて右手でつかもうとする->>
16  戸田:                                              [+う::ん.
    tod                                                 +木村を見て細かく何度もうなずく
```

3 行目で木村は視線と身体の向きで戸田を主な宛先とし，まず，「あの」で新たな連鎖の開始を予示する．続けて「X じゃなくて Y」の文構造を使用して，また上下の指差しで対比を際立たせながら，「川」についてコメントすることを予示する（4 行目）．そして視線を戸田に戻し，やや前傾姿勢を取り，見入るような仕草をしながら，木村は「川」の最後の音を延伸させ，発話の進行を遅らせて，受け手である戸田から承認を引き出す（5 行目）．戸田の承認を聞いてすぐに，助詞「が」を産出することで，木村は述部が後続することを強く予示するが，「その::」という指示詞と音の延伸を用いて，再び産出を遅延させていく．そこで戸田はそれまでの木村の発話の主部「川が」を繰り返し，「一番」という強意語を追加して発話を引き継ぎ，述部が次に続くことを予示しつつ，やはり最後の音を延伸させることで，木村の発話産出を促していく（7 行目）．それに応じるかのように，木村も別の強調表現「（い）や」を用い，述部となる評価（「いい」）を戸田と言葉を重ねてユニゾンで産出し，戸田からの同意を引き出している．戸田は，さらに「う::ん」と木村への同意として自身の発話を明示化する（9 行目）とともに，主催者としての経験にもとづいた川についての評価（「（イベントが）やりやすい」）を，木村の評価とは独立したものとして，少し態度を弱めた形式（「かもしれない」）で行うことで，木村の評価が主催者としてのものであったことへの理解も示す（10 行目）．これに対し，木村もすぐに同意し（「うん」），続けて山に対する対照的な評価を，文構造「X だと Y」と表情（11 行目）によって予示する．その際，音を延伸させて発話産出を再び遅延させることで，戸田による「草刈り」が「ちょっと難しい」という具体的な主催者にとっての困難を引き出し，双方が合意出来る環境を生み出している．現に，それに強く同意（14 行目）を示すことで，戸田の貢献を承認した木村は，もう一度「川」の評価を総評的に（「だから」）行うことで，再び川のよさを認め，それに戸田が同意する形で一連の見解を提示する活動を完了させている．

ここでの木村の発話順番は「木村だけのものではない」ことに気がつくだろう．すなわち，木村が開始した見解の提示に，いまや戸田がユニゾンで参加したり，同意を示したり出来る開かれた順番として構造化されていた．木村は戸田に対し，同じ主催者として川のよさを同様に評価，判断するための知識，経験がある者としてふるまうことを促していたといえる．戸田もまた，主催者として独自の知識，経験に基づいて，イベントの場所を採択あるいは評価する，その権利や責任に志向しながら期待された行為を産出していた．

（3）特定の行為産出のために「見ること」の時間的構成

相互行為において，話し手が確認を求めたことに対して，受け手が確認を与えることは，話し手が達成しようとする行為の実現を促進する同調的応答である．こうした相手の開始した行為を実現するための同調的応答は，遅滞なく行われ，いわば，「産出しやすい」という特徴を持つ．一方，相手が達成しようとする行為の実現を阻止する非同調的な反応は，「産出しにくい」反応として産出が遅延される特徴が記述されている．しかし，応答の直前の沈黙による時間的な間隙が，遅延としてではなく，確認対象を見るために必要な時間として認識可能になること

がある．

断片(4)は，福島県のある山間の町で開催された文化祭の，巣箱作りを子どもたちに体験させる体験会からの断片である．NP1 は復興支援の NPO の職員としてこの巣箱作り体験会を手伝っている．RE1 は本体験会を提案した人物であり，指導的役割を担っている．NP1 と RE1 はこの時並んで巣箱作りをそれぞれ小学生に教えていた．すると，NP1 のほうの生徒が打った釘がゆがんで箱の外側にはみ出してしまった．NP1 はそれを代わりに修正しようと試みるのだが釘は斜めにささったままである（図 1）．何度か釘を反対から打ち込んだりしたが，NP1 はついに断念し，巣箱を持ち上げながら RE1 の方に身体を傾けてある質問を行っていく． 1 行目で NP1 は巣箱を RE1 の方に傾けて問題の釘の刺さった一辺を指差しながら呼びかけ（ちょっと），指示語（こう）を産出しながら視線を巣箱に向け，言語と身体，道具を互いに組み合わせることで，巣箱にささった釘を見るべきものとして構成する．また，作業中の相手に中断する形で話しかけることで，それに値する十分な理由があることも示唆される．すなわち，釘のはみ出しは，トラブルとして提示される．

(4) [subako_0002] [7:29] 黒嶋(2022)より
((NP1 がはみ出た釘を反対から打ち込んでいるのを止め，NP1 が巣箱を持ち上げながら立ち上がる))

```
01  NP1:    %ちょっとこう:::なって*て:::,
    np1     %巣箱を RE1 の方に傾け巣箱(図1)の底の一辺を見ながら指す-->
    re1 →                    *NP1 の巣箱を見る->>
02          (0.2)
03  RE1:    ああ%::,
    np1         %RE1 を見る->>
04  NP1:    変えたほうがいい'すかね:: >こっち<*使え%そうですかね:？
    re1 →                                  *体をやや左に傾け巣箱を見続ける-->
    np1                                        %巣箱を見る->>
05  NP1:    [%こっち.
    np1      %巣箱の下を確認-->
06  RE1:    [あ s:::-
07          (1.8)
08  NP1:    %*行けると思います?
    np1  →  %巣箱を机において RE1 を見る(図2)->>
    re1      *徐々に体勢を戻しながら巣箱を見る->>
09          (0.2)
10  RE1:    あ:: はい.
11  RE2:    これ，こうやって +(          )
    re2                      +NP1 から巣箱を取る
12  NP1:    ああ，ああ，はい.（置きます.）
```

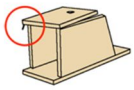

図 1 ：釘がまがってしまった巣箱

図 2: 8 行目

このようなトラブルの提示を受けた RE1 は，NP1 の示す巣箱をまず見て巣箱に志向を示し（1–2 行目），それをまず認識したことを主張する（3 行目）．すると，NP1 は RE1 を宛先としながら確認要求を行なう（4 行目）．この確認要求は，自身の取るべきトラブル解決の手段候補について，より専門的知識があるとされる相手に確認を求めていることから，助言の求めとして理解可能である．4 行目の間，RE1 は巣箱を，自身の身体の角度を変えながら見続け，観察していることを他者が見て理解できる形で身体的に示している．この助言の求めを産出する間，受け手がトラブルとなっている対象をじっくり見て観察することは，助言の求めに対して応答するために必要な観察を行っていると理解可能である．NP1 もそう理解したことを，RE1 から視線を再び巣箱に戻し（4 行目）RE1 に観察のための時間を提供することで示す．1.8 秒の切れ目をはさみ，ようやく，8 行目で NP1 は再び RE1 を見て，再度助言の求めを行う（8 行目）．興味深いのは，この助言の求め（「行けると思います？」）は，4 行目の助言の求め（「変えたほうがいい ’すかね:: >こっち<使えそうですかね：？」）よりもより包括的な判断を促していることである．すなわち，期待される助言の求めへの応答が，遅延しているのではなく，7 行目の沈黙がトラブルを見て判断するという時間的間隙を構成していることの理解の表示となるよう，別の観点の提示による助言の求めの拡張としてデザインされている．実際 RE1 は，まだ巣箱を見続け，10 行目で NP1 の提示した解決策にただ同意を示すのみの応答をする．しかし，この同意は，ここで期待されている応答としては不十分に見えるだろう．まさにこの局面でなされる別の住民 RE2 による，具体的な助言は（11 行目），まだ十分な助言が産出されていないものとして構成されているのである．

引用文献

Garfinkel, H. (1967). Studies in Ethnomethodology. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

黒嶋智美．(2022).「第 7 章 同定・観察・確認作業の構成における「見ること」の相互行為的基盤」『外界と対峙する』 ひつじ書房，pp. 150-168.

黒嶋智美．(2023).「第 3 章 合意形成における経験，知識，権利―住民座談会の事例をもとにして」『実践の論理を描く 相互行為のなかの知識・身体・こころ』 勁草書房，pp. 59-76.

Nishizaka, A. (2017). The moral construction of worry about radiation exposure: Emotion, knowledge, and tests. *Discourse and Society, 28*(6), 635-656.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　11件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Satomi Kuroshima	４．巻 25
２．論文標題 When a request turn is segmented: Managing the deontic authority via early compliance.	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Discourse Studies	６．最初と最後の頁 114-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/14614456221136975	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黒嶋智美	４．巻 なし
２．論文標題 第7章 同定・観察・確認作業の構成における「見ること」の相互行為的基盤	５．発行年 2022年
３．雑誌名 外界と対峙する	６．最初と最後の頁 150-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黒嶋智美	４．巻 なし
２．論文標題 第3章 合意形成における経験，知識，権利―住民座談会の事例をもとにして	５．発行年 2023年
３．雑誌名 実践の論理を描くーー相互行為のなかの知識・身体・こころ	６．最初と最後の頁 59-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kuroshima, S., Dimoski, B., Okada, T., Yujobo, Y. J.., & Chaikul, R.	４．巻 5
２．論文標題 Navigating Boundaries through Knowledge: Intercultural Phenomena in ELF Interactions	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Englishes in Practice	６．最初と最後の頁 82-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2478/eip-2022-0004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kuroshima,S., Dimoski,B., Okada,T., Yujobo,Y. & Chaikul,R.	4．巻 2
2．論文標題 'Translanguaging' Gestures and Onomatopoeia as Resources for Repairing the Problem	5．発行年 2022年
3．雑誌名 The CELF Forum	6．最初と最後の頁 68-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kuroshima Satomi、Ivarsson Jonas	4．巻 4
2．論文標題 Toward a praxeological account of performing surgery	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Social Interaction. Video-Based Studies of Human Sociality	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7146/si.v4i3.128146	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Satomi Kuroshima	4．巻 4
2．論文標題 Working Toward Group Accomplishment Through a Proposal Sequence	5．発行年 2022年
3．雑誌名 JAAL in JACET Proceedings	6．最初と最後の頁 302,316
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 黒嶋智美	4．巻 -
2．論文標題 相互行為のなかの認識――外科手術場面の会話分析より	5．発行年 2022年
3．雑誌名 第94回言語・音声理解と対話処理研究会資料	6．最初と最後の頁 100,106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nishizaka Aug	4．巻 190
2．論文標題 The granularity of seeing in interaction	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Journal of Pragmatics	6．最初と最後の頁 24～40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.pragma.2021.12.016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nishizaka Aug	4．巻 23
2．論文標題 Seeing and knowing in interaction: Two distinct resources for action construction	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Discourse Studies	6．最初と最後の頁 759～777
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/14614456211017712	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 黒嶋智美	4．巻 31
2．論文標題 医療記録を「読むこと」と「見ること」の会話分析	5．発行年 2021年
3．雑誌名 保健医療社会学論集	6．最初と最後の頁 67-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18918/jshms.31.2_67	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kuroshima Satomi	4．巻 3
2．論文標題 Therapist and patient accountability through tactility and sensation in medical massage sessions	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Social Interaction. Video-Based Studies of Human Sociality	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7146/si.v3i1.120251	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Satomi Kuroshima, Stephanie Hyeri Kim, Kaoru Hayano, Mary Shin Kim and Seung-Hee Lee	4．巻 vii
2．論文標題 Chapter 8. When OKAY is repeated: Closing the talk so far in Korean and Japanese conversations	5．発行年 2021年
3．雑誌名 OKAY across Languages	6．最初と最後の頁 236-265
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/slsi.34	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 須永将史	4．巻 31
2．論文標題 診察の開始位置での問題呈示はどう扱われるか――「ちょっと先生さきに相談あるんだけど」の受け止め――	5．発行年 2021年
3．雑誌名 保健医療社会学論集	6．最初と最後の頁 57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18918/jshms.31.2_57	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Dimoski, B., Kuroshima, S., Okada, T., Chaikul, R., Yujobo, Y.J.	4．巻 8
2．論文標題 The initial stages of developing resources for teaching communication strategies in ELF-informed pedagogy	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Waseda Working Papers in ELF	6．最初と最後の頁 105-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　2件／うち国際学会　15件）

1．発表者名 Satomi Kuroshima
2．発表標題 Invoking the third-person perspective: Distribution of deontic responsibilities in the construction of an assertion
3．学会等名 17th Annual Meeting of American Sociological Association (ASA)（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Kuroshima, S., Dimoski, B., Okada, T., Yujobo, Y.J., & Chaikul, R.
２．発表標題 Doing ‘being an expert or a novice’: Extended other-initiated repair sequences in ELF interactions
３．学会等名 13th International Conference of English as a Lingua Franca（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 黒嶋智美
２．発表標題 高大連携と大学全体での連携 玉川学園シンポジウム新学習指導要領のもとでの英語教育ー縦横のれん系と教員養成
３．学会等名 第４回大学英語教育学会ジョイントセミナー（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Satomi Kuroshima, Makoto Hayashi
２．発表標題 Beginning to explain: Nanka-prefaced responsive and initial actions in Japanese conversation
３．学会等名 17th International Pragmatics Conference (IPrA)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Satomi Kuroshima
２．発表標題 Invoking shared knowledge in proposal sequences for collaborative activities
３．学会等名 American Sociological Association (ASA) 116th Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Satomi Kuroshima, Sachie Tsuruta, Katsumi Harima
２．発表標題 “Normally speaking”: A normalization device to resist heteronormativity
３．学会等名 American Anthropological Association (AAA) 120th Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Satomi Kuroshima, Blagoja Dimoski, Tricia Okada, Yuri Jody Yujobo, Rasami Chaikul
２．発表標題 ‘Translanguaging’ Gestures and Onomatopoeia as a Resource for Repairing the problem with Speaking
３．学会等名 ENRICH（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Satomi Kuroshima
２．発表標題 Working toward group accomplishment through a proposal sequence: Conversation analysis of a college English learning activity
３．学会等名 4th JAAL in JACET（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 黒嶋智美
２．発表標題 相互行為のなかの認識――外科手術場面の会話分析より.
３．学会等名 第94回言語・音声理解と対話処理研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Aug Nishizaka, Masafumi Sunaga, Kotaro Sambe
２．発表標題 Ideas Distributed among Multiple Voices: Discussions in Protests against the Construction of Narita International Airport
３．学会等名 American Sociological Association (ASA) 117th Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 西阪仰
２．発表標題 相互行為における「見ること」と「触れること」：「詳細を調べること」と行為の構成
３．学会等名 第94回言語・音声理解と対話処理研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Satomi Kuroshima
２．発表標題 Invoking the third-person perspective: Distribution of deontic responsibilities in the construction of an assertion
３．学会等名 American Sociological Association (ASA) 117th Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 黒嶋智美
２．発表標題 デモンストレーションを是認・否認することー指導者の演奏を止める実践から
３．学会等名 第37回日本認知科学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Satomi Kuroshima & Tomone Komiya
２．発表標題 Cross-Cutting Preference of the Evaluation of Radioactive Dose: Local Epistemology and Moral Accountability
３．学会等名 114th Annual Meeting of American Sociological Association (ASA)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 黒嶋智美
２．発表標題 医療記録を「読むこと」の会話分析
３．学会等名 第45回日本保健医療社会学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Satomi Kuroshima
２．発表標題 Accommodating the construction of request turn to the timing of compliance: In case of an immediate request in Japanese service encounters
３．学会等名 The 16th International Pragmatics Conference (IPrA)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Blagoja Dimoski, Satomi Kuroshima, Tricia Okada, Rasami Chaikul, Yuri Jody Yujobo
２．発表標題 Conforming to native speaker norms?: An initial investigation of Japanese learners’ communicative capability in ELF interactions
３．学会等名 ELF 12（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Satomi Kuroshima
２．発表標題 Dealing with surgical uncertainty: Acknowledging, accounting, and calibrating for the procedures of surgical operations
３．学会等名 The 2019 Conference of the International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (IIEMCA)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Satomi Kuroshima & Tomone Komiya
２．発表標題 Members' Evaluation Methods for Measuring Radioactive Dose
３．学会等名 114th Annual Meeting of American Sociological Association (ASA)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Dimoski, B., Yujobo, Y. J., Okada, T., Kuroshima, S., & Chaikul, R
２．発表標題 Borderless’ Online ELF Spoken Interactions: Participants’ Views and Perspectives Through ‘Accommodation’ Strategies.
３．学会等名 58th JACET International Convention（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 黒嶋智美
２．発表標題 救急初期診療シミュレーションにおけるファシリテータの「指導すること」とは
３．学会等名 第47回日本救急医学会総会・学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 黒嶋智美
２．発表標題 ことばを介さないニーズの提示と援助の提供 ―就労支援の相互行為分析（２）―
３．学会等名 第92回日本社会学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 黒嶋智美
２．発表標題 知識の確認デバイス：『て（いう）こと』による理解候補の提示 ―英語学習活動の相互行為における知識や理解の交渉―
３．学会等名 第22回日本語用論学会大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 小宮友根・黒嶋智美（共編著）	４．発行年 2023年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 336
３．書名 実践の論理を描くー相互行為のなかの知識，身体，こころ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小宮　友根 (KOMIYA Tomone) (40714001)	東北学院大学・経済学部・准教授 (31302)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	西阪　仰 (NISHIZAKA Aug) (80208173)	千葉大学・大学院人文科学研究院・名誉教授 (12501)	
研究分担者	須永　将史 (SUNAGA Masafumi) (90783457)	小樽商科大学・商学部・准教授 (10104)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岩田　夏穂 (IWATA Natsuho)	武蔵野大学・グローバル学部・教授 (32680)	
研究協力者	早野　薫 (HAYANO Kaoru)	日本女子大学・文学部・准教授 (32670)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Advanced Methods in Conversation Analysis and Multimodality	2024年～2024年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関